

「ほら、見てくれ深山！ HUBLOT ビッグ・バンがやっと入荷したんだ」

男性にしては小柄な体に新調したのブリテッシュスタイルスーツをまとった高山は、研究室に入ってくるなり、一人パソコンでプログラムを書いている深山に声をかけると目の前に左腕を掲げ、得意気に話し出した。

少しうねったボブカットの黒髪に、大きな黒ぶちメガネを掛け、26歳妙齡の女性にしては飾りつきのない深山はというと、いつも通り感情の読めないきよとんとした表情で、目の前に掲げられた存在感のある腕時計に目をやった。

「あ、社長おつかれさまです。へーなんか男の人っぽい腕時計ですね。黄土色が入ってるのも珍しいし、いいんじゃないですか」

「いやそれだけかよ。いくらしたと思う？」

「え、ヒントはなにもないんですか」

「まあ、あれだなあ。お前が思ってるよりもすごく高いだろうとは、思う」

「んーそうですね。ヒントはそれだけでいいか？」

「それだけだ。いくらだと思おう？」

「じゃあ、1000万とか、ですか？」

「……」

「あれ？ 全然違いました？」

「……」

その時、研究室のドアが開き、男性社員である佐野がなにやら忙しそうに電話をしながら入ってきた。高価なものを好むものの、髪型や着こなしがどこか垢抜けない高山と違い、佐野は自然に流暢な筋肉質な長身に映えるスーツ姿も、濡れたようにまとめられた髪やビジネスバッグも、細かなところまで洗練されていた。

「ええ、はい。そうですね、大体1体200万円からになりますよ、オプショ

ンをどうするかによって変わっていくので、肌感も人間と変わらないハイエンド仕様にするなら1000万ほどになりますよ

すかね。でも、個人の趣味でだいぶ変わってくるので、そこまでこだわりがなければ大体400万ほどで満足いく個体が

1体ご購入いただけるかと思えます。はい。好みの顔などのオプション資料は別途ダウンロードいただけますので、そちらもご覧くださいましたらおわかりいただけます

かありましたら。はい、失礼いたします。……ふう。ああ、おつかれさまです」

「新しい契約希望者か？」

「そうですね、問い合わせはバンバン入ってくるんですが、あれですね。年配になればなるほど購入に対して慎重になる

というか……。やつぱ人間年をとると保守的になるもんなんすかねー。ああ！

というか社長！ その時計どうしたんですか!? 超いやつじやないですか！」

people

「お前さすが目ざといな！ 今日やっと届いたんだよ！ HUBLOTビッグ・バン301.PB731.RX！」

「うわーすげえカッコイイ！ これ確か200万くらいしますよね!? いやーすげえつすね。20代でこれ買える人なかなかいないつすよ！」

「まあ、お前もすぐ買えるようになるよ」

「まじつすか、頑張ります！」

2人は抑揚をつけた大きな声色で、なにやら盛り上がりはじめた。時計のことは深山にはよくわからないが、声のボリュームが上がるほど、なにやらすごい時計だったらしい、ということはおわかった。

「じゃあ俺いまから代理店と会食行ってからから、おつかれ！」

しばらく騒いだあと、いつもより機嫌がよさそうな高山は研究室を出て行った

白い壁にかかった時計を見ると、もう18時である。そろそろ帰ろうか、まだもう

少しここにおいて製品チェックをしようか  
深山は迷った。

「というのも、こんな時間に仕事を終えることができるようになったのはここ最近のことだったからである。」

3年前に同じ研究室の先輩である高山の発案で研究室内ベンチャーを立ち上げ、後輩であった深山が開発した性交渉機能搭載人型汎用AI、NO13・Sの製品化が世の中に受け入れられたことが、なによりも大きなキッカケであった。

深山たちは、法が改正される以前から人間が抱える「孤独感」に寄り添えるような人型汎用AIの開発に目をつけ、なおかつそれまで漠然とタブー視されていた性交渉機能も搭載した。

性交渉機能搭載といってもできるのは快楽目的の性交渉だけで、AIを妊娠させることはできないのだが、人間の孤独感を払拭するためには性交渉機能は必要不可欠なものだとする方針のもと、このAIの開発に踏み切ったのである。

といっても性交渉機能搭載人型汎用AIの発案者は社長の高山である。金を手に入れ、世間に名を轟かせたいと息巻く社長の高山と後輩の佐野。そして局部的ではあるが優秀なAIのプログラマーであった深山を入れた3人の需要と供給が見事なまでに一致して、NO13・Sの開発は成功を遂げたのだった。

「いやー社長テンション高かったですね」

## people

すつきりとした研究室のデスクの上に黒い本革のビジネスバッグを置き、スーツの上に薄手のコートを羽織った佐野が帰り支度をしながら深山に話しかける。

「うん、佐野くんが来る前はそうでもなかったけど。時計、いくらすると思う？」

「え？ いくらって言ったんすか？」

「すごく高いつていったから、1000万って」

「……いや、深山さん。そういう時はちょっと低めに言うんですよ、普通は」

「そうなの？ だってすごく高いつていわれて、思いついたのが1000万だったから」

「いや、言ってることはわかりますけど、それだと社長が喜ばないでしょ？ 笑顔ですごいですねー！ って言うもんですよ。深山さん表情いつも硬いから」

「……そっか、そうだよ」

「そういうもんですよ、入って。AIはつかじやなくてたまには人と触れ合ったほうがいいですよ。じゃ、社長も帰ったし俺も失礼します。おつかれつ。戸締りよろしくです」

「そういうと佐野はまたどこかに電話をかけ、「おつ、いま終わったよ」ときつきよりもくだけた口調で話しながら部屋を後にした。

研究室には、AIや工学に関する學術書が並ぶ本棚と、デスクが3つ置かれており、各デスクには拡張機能搭載の透過型パソコンとポリッドスクリーンが2つずつ並んでいる。殺風景な雰囲気でも取り払おうと義務的に置かれた観葉植物の鉢が部屋のすみにも1つ。空気清浄機の音と、白い壁にかかった時計の音だけが静かに響く。ガラス窓の外には、濃い橙色と紫色が織りなす夕焼け空に桜が舞っており、重そうなビニール袋をもった学生たちがなにやらはしやぎながら歩いている。

深山は学生たちの姿を見て、祇園にある円山公園の名所、お化け桜の下で新生歓迎会を行った8年前の春を思い出す。周りに上手く溶けこめず、敷かれたブルーシートの中で、オレンジジュースを片手に散った桜の花びらを観察しながらお開きになるのを待った青春のページである。

円山公園は京都の中心地にある、八坂神社と知恩院に隣接した古都の趣きを残した風情ある公園である。灯籠が傍に置かれた池には鯉が泳ぎ、春になるとソメイヨシノと祇園枝垂桜で彩られる花見の名所である。敷地内に立つ料亭のやわらかな灯火に照らされた桜と、明治時代に建てられた辺りの洋館の青銅色の屋根や京町家の紅殻格子が文化的な雰囲気漂わせる。

建築物の近代化が進む今日でもなお、昔と変わらない景観が守られた場所が圧

倒的面積を占めるのが、京都という町の在り方である。

深山の実家は、円山公園から自転車道15分ほど南下したところにある商店街の側にあった。シャッター式のガレージの前に車停めの敷地があり、高い門構えも立派な2階建ての大きな家で、古びた民家が並ぶ周囲からは独立した雰囲気がある豪勢な家に住んでいた。

深山には、天気の良い日はおよそ一時間ほどかけて研究室まで自転車通勤するという日課があった。電動自転車主流の中、深山は電動機能がついていない古めかしい赤い色の自転車を愛用していた。無心でペダルを漕ぐことで頭が冴えるからという理由ともう一つ。石畳の小路を抜け、円山公園を通り、鴨川まで出て川辺をひたすら北上する通勤路が、季節によつて表情を変えていくので、その様子を見るのがお気に入りだったからである。

高山と佐野が賑やかさまで連れて出て行ってしまったような無機質な部屋で、深山はまたポリッドスクリーンに目を向け、やってきた春の日の思い出を懐かしみつつ、佐野が残していった言葉の意味を考えていた。

人と触れ合う、といっても、適当に入ったバーかなにかで実際に知らない人と話すようなモチベーションもなければ、想像したところでもなにも楽しそうな可能性に迫り着かない。触れ合う、とは少し違うかもしれないが、人間の心の機微をもっと感じるような情報に触れたほうが

いいという解釈でおそらく間違っていないだろう。そういう結論にたどり着いた深山は、静けさが心地よい研究室で再びパソコンに向かい検索スピーカーに話しかけた。「AI 結婚 ブログ」

深山は人と円滑にコミュニケーションをとることが不得意であった。大学院を出て研究職につく歳になっても尚、人と密に関わる際に会話に少しズレが生じているというのは自覚があったが、周囲の人からすると小さなズレではなく会話が成り立っていないと感じてしまうほど、深山の受け答えは変わった発言の連続であった。けれども深山は人との関わり合いが苦手であるとは思っておらず、ただ会話の中で相手がなにを言いたいのかなにを真意として婉曲表現を用いているのか、というのを察することが得意ではない、程度の認識であったのだ。

深山自身よりも周囲の人々のほうが深山との会話の最中、頭の中に疑問符が浮かび上がるのが多く、後からそれを指摘されて「ああ、私ちよつとズレてたのか」と時間差で認識していたので、周囲との距離感を埋められずにいた。

しかし本音と建前、一見相手を褒めているようにも受け取れる皮肉が蔓延したこの京都という土地では、深山の性格は「賢いからか、面白いこと言わはる人やね」とオブラートに包んだ言葉で表現され、変人レッテルを貼られるのが常であった。

この土地に長く暮らしている京都人ならば、「私なにか間違ったこと口走ってしまったのかな」と嫌でも勘づかざるを得ないのだが、深山は持ち前の個性的思考を発揮して、ここでも「ああ、私って賢くて面白い人間なんだ」と言語の枠をはみ出さない自己評価を下していたのだ。京都市東山区出身の深山であったが、おおよその京都人ならば根付いているであろう独特の言語ルール、というものが深山の標準装備にはないようであった。人の考えていることを純度高く受け取るには、言語から読み取るのが一番だと深山は常々考えていた。というのも、人間のコミュニケーションの取り方には2パターンあるからである。

1つは相手の表情やバックグラウンド、声色など非言語領域からも感情を汲み取って、相手が喜ぶような言葉を投げかけるといふコミュニケーション方法。もう1つは、相手が投げしてきた言語に対して、後天的に身につけた正解であるう適切な言語を返し、ラリーを続けるというコミュニケーション方法である。深山が身につけてきたのは、この2つでいうと圧倒的に後者のコミュニケーション方法だった。

深山は自分のコミュニケーション方法は、いつか京都大学霊長類研究所の館内ビデオで見た、チンパンジーにりんごを見せると反射的に手元にある赤いボタンを押すという反応の仕方に非常に似ていると考えていた。

このような言葉を投げかけられたら、このような返答を投げ返すのが正解であるという投球のボキャブラリーを増やしながら、深山はいままで対人関係を結んできたのだ。

そういった方法をとっているので、さつき高山が投じてきたような初めての球に対しては、真意として何を求められているかの判断を誤ったのだ。

佐野はそのあたりは器用で、相手がいま欲している返答がすぐにわかるようであった。相手が望んでいる言葉に賞賛をさらりと交ぜた言葉を自然に打ち返すスキルに長けていた。深山よりも後天的に身に付けたボキャブラリーが豊富というわけではなく、嗅覚めいたもので判断しているのであろう。心がどこまでこもっているかの追及はおいておくとして、第一印象における佐野は人心掌握術の鬼とも言える。

そのような経緯があつて、人の真意を一番純度高く理解するためには、文字として読むのが合理的だと考えていた深山は、自分が作ったNOI3・Sがどのような層に響いているのか、またどのような機能を人々が望んでいるのか、といったリサーチは、不特定多数の声を非言語というノイズなく聞くことができるネット上に記述された声を拾うのが一番手軽で、理解しやすいと考えていた。NOI3・Sを開発した際に想定した購入者のペルソナ想定は40代後半から50代の男性であったのだが、深山が偶然見

つけたブログの書き手はペルソナより一回り以上若い30代前半であった。

どうやらこのブログの書き手は、安定が欲しいのでAIと結婚する、とのこと。綴られた文中には詩的な言い回しも多いので、深山としては正確に書き手の意図をくみ取れているのか自信がない部分もあったが、30代前半でいま感じている孤独感を一過性のものだと思えずに、永続的なものだと思われるのが非常に不思議であった。

よっぽど大きさに物事を騒ぎ立てるような思考の持ち主なのか、それとも極度の寂しがりやなのか。扁桃体が生み出す情報に振り回されているだけであつて、寂しいなんて感情は、ただの幻影なのだと深山は頭の中で呟きながらブログを読み終えた。

けれども、その寂しいという気持ちに訴求することがAIの可能性を見出すことに直結するのだ、という高山の言葉をもと思いつく。

それは3年前の春。まだ会社が出来て間もない頃の話である。叡山電車元田中駅の踏切近くにあるこじんまりとしたイタリアンバルで、3人で食事をした時のことだ。赤を基調とした店内はさっぱりとした研究室と違い、深山たち以外に人がいなくても活気づいているように感じられた。熱されたフライパンの上で食材に火が通る音と、オリーブオイルに落と





されたニンニクの香りが店内に立ち込め、空間全体が陽気で満ち溢れているようだった。

「結局さあ、男は孤独な生き物なんだよ。それを心地よく満たすのが、今後人型汎用AIの課題となってくるんだよ。そこで顔や体のパーツも、皮膚のリアル感も全てカスタムオーダーできるとなれば、孤独な独身男性に手堅く訴求できるだろう？」

運ばれてきたビールグラスを手に取ると、乾杯する隙もなく軽く一口飲み、高山は語り始めた。

「わかります！ 結局そういうところに行き着きますよね。ていうかビジネスチャンス的にみると、そういう市場はデカいっすもん。あとおつかれーっす」

礼節を重んじているのか、中高時代の野球部ノリをひきずっているのか、高山が持つグラスに対し低い位置で乾杯をした佐野が、さらに高いテンションで語り出す。

「そうそう！ いやだからさ、絶対いけるっていかいませしかないよな。ほら、やっぱいま性のメディア化が当たり前になったじゃん、すぐに好きなタイプの子をネット上で見つけられるわけで。だから実際の女を相手するってのもなにかと面倒だったりするのよ」

「あーですよ。俺もいまの彼女のこと好きっすけど、意味不明に嫌悪くなくなったりしますもんね」

「いまの彼女ってこないだ木屋町で見かけた、あの読者モデルの？ あの子ハーフっぽくてわりと可愛いかったよなあ」

「いや、あの子は彼女じゃないっす。女医のほうです」

あっけらかんと答える佐野に対して、高山は一瞬口ごもる。

「ああ、そっか……。まあ、けどさ結局人間もさー、自分に都合のいい快を与えてくれる人間に好意を持つわけよ。それが、人型汎用AIの目指すべきスコアなわけ。深山、俺の言ってることわかる？」

「……あれですか？ えーと、結局間違いを起こさないようなコミュニケーション能力を高めるプログラムを組めってことですか？」

少し考えたのちに話し始めた深山の言葉のあと、少しの沈黙が流れたが、高山と佐野は「ん？」と少しバカにしたような顔でアイコンタクトをとっていたので、2人は意思の相通ができていたようだった。

「……いや、だからさ。いっつも言ってるけど深山はちよつと硬く考えすぎっていかさ、ズレすぎなんだよね」

「そう！ いっつも言ってることは間違っていないんですけど、ちよつと違うんすよ！ 俺と社長が言いたいのはそういうことじゃないんすよ！」

「さっきの話に戻るけど、昔からよく言うじゃん、男には港が必要、的なやつ！ でもあれって実際はさ、現代において家庭での実現が難しくなってると思うんだ

よねー。ほら、基本的に共働きじゃん？

そうなってくるとさ、女性のほうも自分

本位になってくるっていかさ。古い人

間みたいなこというけど、そういう男の

ロマンを満たすフィールドが外にしかなくな

ってくるんだよね。例えばキャバとか

飲み屋もそうじゃん」

「わかります！ 結局人型汎用AIを買

う層って、まだそういう男とは”的

意識が強い世代になりますもんね」

「……あ、たしかに。帰宅恐怖症って

うのもいまあるみたいですしね」

深山は必死に会話に食らいつこうと、

最近ネットで見かけた知識を披露したが、

いつも通り高山と佐野にはいまいち刺さ

らなかった。

「いやいや、それは極端な例だけどもさ。

俺が言ってるのはなんていうのかなーい

つでも待っててくれていて包み込んでくれ

るような！ そして放っておいても機嫌

が悪くならないような！ で、さらにい

うとそういう魅力的な女性っていうのは

今後人型汎用AIが叶えてくれる理想の

ひとつのフォーマットになるんじゃない

かってこと」

「それって、母性的でかつ性対象として

も魅力的な女性像ってことでしょう

か？」

「そうそうそう！ まさにそれ！」

運ばれてきたホタルイカと春菊のリン

グイネを自分の皿に取り分け高山が、

右手にもったフォークを深山のほうに向

け相槌をうつ。

「わかります、やっぱ男が最終的に選ぶのってそういう女性っすもんね」

「いやー俺も最近いい加減落ち着いても

いいかなーとか思ってきて、そんな女

いたら紹介してほしいわー。ほら、別に

不自由なく養っていきけるわけじゃん」

「社長に似合うような美女、俺の周りには

はいないっす。あ、けど女子アナになっ

た後輩いるんで誰かいないか聞いときます

す」

「おお、その子の写真とかないの？」

「ちよつと待ってください。あーこれっ

すね」

佐野が手渡したスマホには、白いシャツ

を着た、童顔で意志が強そうなぱつち

りした目つきの美女が映し出されていた。

「えー！ この子可愛いじゃん、俺この

子がいい！」

「この子っすか……一応言ってみますけ

ど、俺に彼女がいることは内緒にしとい

てくださいね。いない設定になってるん

で」

佐野の回答に、高山はなにかを察して

黙りこむ。高山と佐野の掛け合いがひと

段落したのを見て、深山はグラスを置き

自分の意見を述べた。

「社長、さっきおっしゃった母性的かつ

性的魅力のある女性像って、女性性が神

聖化された結果生じる女性軽視なんじゃ

ないでしょうか？ つまりは、自分がど

んなことをしても決して乱れることなく、

常に男性を庇護し支えるような女性像を

人型汎用AIに代用させるってことです

よね？ それってなんだか女性の尊厳に  
対して時代性と逆行していませんか？」

「いや、深山。だからビジネスチャンス  
があるって話だよ。いま別にジェンダー  
云々の話をしてるわけじゃないのはわか  
るだろう」

高山は深山のほうを向かずパスタを食  
べながら、話を続けた。深山は食事に手  
をつけず、高山の言葉の意味を純度高く  
理解しようと会話に集中していた。佐野  
はというと、高山のグラスが空きそうな  
ことを確認し「社長、次なに飲みますっ」と、さつとドリンクメニューを差し出す。

「深山さん、人型汎用AIは人間の代用  
として求められてるんですから！ それ  
は研究者ならわかってるでしょ！ 社長  
が言いたいのはそういうことですよ！」

「……つまり、どういうことですか？」  
「つまり、俺たちは今後、人類から孤独  
という感情を拭い去ることが出来るかも  
しれないってわけだ」

「あーその言い方かっこいいっすね！  
すげえ使命感湧いてきますっ！」  
「……性交渉機能搭載人型汎用AI、こ  
れを商業ベースで開発できれば、俺たち  
は人類の感情を1つ消し去ることができ  
る」

パスタを食べ終えた高山が、再び格好  
をつけてかフォークを深山にびしっと向  
けた。

「孤独、ですか」

「そう。深山はもしかするとピンとこ  
な  
いかもしれないけど、孤独とか寂しいと

いう感情に訴求することは、AIの可能  
性を見出すことに直結する。AIを進化  
させることは、人類を進化させることに  
繋がるんだ」

「それは……本当に進化なんですか？  
退化になる可能性はないんですか？」

言葉尻の正確性にこだわる、というの  
が深山の癖であることはわかっていたが、  
高山はそういった言語ゲームのようなや  
りとりを好まない人であった。

細かいことを詰めすぎると、場の空気  
を散らすように、リラクゼーション効果  
のある電子タバコをくわえ始める癖が高  
山にはある。そしてこういう雰囲気にな  
ると、きまって佐野が「まあ、乾杯しま  
しょ！」といった場を仕切り直すか、高  
山が身につけているファッショナイテ  
ムを褒め出し、話題を変えるのだった。

しかし、この日高山は見慣れたスーツ姿  
であったため、佐野は「社長、これめっ  
ちゃ美味くないですか？」とテーブルの上  
の子羊のローストに話題を移した。

「いや、けど俺もいいと思いますねー絶  
対売れますっつてそれ。深山さん絶対これ  
いけますよ」

「性交渉機能搭載人型汎用AIってこと  
は、それはなにを最高スコアとすればい  
いでしょいか？ 精液の保存が目的な  
のか、性行為自体の満足が目的なのか」

深山はまた言葉の正確性を追求し出し  
たが、今度は製品開発に直結する質問で  
あったので、高山は深山にまっすぐ向き  
合うよう姿勢を正し、答える。

「性行為自体の満足と、生身の人間が相  
手をしているような臨場感だ」

「満足と臨場感、ですか。具体的にはど  
ういうことですか？」

「そこはこの製品の肝だから、カスタム  
品とバージョンを多数用意しようと思っ  
ている。皮膚感であったり局所の形状で  
あったり体脂肪の度合いだったり、ノー  
マル仕様の他にカスタム品を多数用意し  
て、より理想を叶えられるよう消費者に  
選ばせる、というプランで考えている」

「なるほど、つまりそこはプログラムの  
問題ではなく、社長と佐野さんが考える  
領域だということですね」

「深山はとにかく対ユーザーの反応にお  
いて、AIの表情バリエーションを増や  
すにはどうすればいいのか考えてくれ。  
満足度はユーザーの表情からスコアを測  
るように設定すればいい」

「……ディープリンングで表情バリエ  
ーションを多く読み込ませることができ  
れば不可能ではないと思います。正確性  
をどこまで担保できるかはやってみない  
とわかりませんが」

「……よし、じゃあそれで。表情バリエ  
ーションの資料は佐野と話し合っ  
てくれ。院生に頼んでもいいが、ちょ  
っとデリケートな分野だから、そのあた  
りは佐野を通してやるということ。俺  
たちは新しい文化をつくる。深山、新し  
い文化をつくるために必要なものってな  
にかわかるか？」

「想像力と知識ですか？」

## people

「文化をつくるのに必要なのは、革新だ」  
この日を皮切りに、深山たちは性交渉  
機能搭載人型汎用AIの開発に取り掛か  
った。

AOIからプロトタイプを製作し、商  
品として市場に出せるレベルになるまで  
AとNのアルファベットの分試行錯誤を  
重ねて誕生したのがNO13・Sである。  
発売前からネット上で良くも悪くも注目  
を集めたNO13・Sであったが、実際  
に市場に出してみれば最新ガジェット愛  
好者からアダルトコンテンツマニア、ま  
た実際に購入してみた社会学者など、多  
くの識者から高評価を得て一般消費者に  
も安堵感を与え、ヒット商品として人間  
の孤独感払拭に新たな一手を打つことと  
なったのであった。

(プロローグ 了)